雨と君。

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨と君。

【Ｎコード】

Ｎ８０１５Ｑ

【作者名】

音無　無音

【あらすじ】

恋愛短編第二弾目です。第一弾は作者マイページからどうぞ。

【あらすじ】俺の人生を変えてくれた君と、あの日の雨。　そんな君は俺にとって遠い存在。　そんな彼女はあの、雨の日と同じシチュエーションで・・・・・・

（前書き）

登場人物

・関谷　透【せきや　とおる】

・新宮　紗千【にいみや　さち】

【※】

オタクな格好、とありますが

あくまでも比喩です。

自分もオタ属性に入りますがそんな訳ではありません。

気分を悪くされた方は、申し訳ありません。

“どうしたの、濡れちゃうじゃない。
これ、貸すよ。返さなくって良いからね”
あの、雨の日。
名前も知らなかった彼女、新宮（にいみや）紗千（さち）は外見オタク、の俺、
関谷（せきや）透（とおる）に、そう優しくしてくれた。
俺はその子をよく見かけるようになった。
その子も、俺を構ってくれた。
『ねえ、君かっこいいんだし、髪の毛切って、着崩しちゃえ！』
『え？あー、考えておきます』
『なにその敬語！じゃあ、私と今日一緒に行かない？』
おかしな提案だった。
だけど、断る理由も、当ても無かった俺はすんなりと、
『あ、はい』
と言ってしまった。

『かっこいいじゃん！』
彼女に褒められたのは別段と嬉しかった。
美容師さんたち、曰く。
そこらのモデルに匹敵しないイケメンだったそうだ。
どうでもいいんだけど。

それから、幾らか経ったある日。
彼女の転校が知らされた。
知り合って、一ヶ月も経ってない日の出来事だった。

『な、何で言ってくれなかったんだよ？』
『だ、だって、それじゃ、貴方、哀しいでしょ』

『そ、そーだけど、俺ら、“友達だろ！？”』
『！！』
その言葉に彼女の表情が一変した。
『さ、最低。関谷君なんか大嫌い』
今にも泣き出しそうな声を出し、俺のそばから離れた。
『・・・・・・・・・・・・・・・』

一年後――。
もとい、現在。
「あ、見て見て！かっこいいーっ！」「ほんとだ、関谷先輩だ！」

「いいよなあ、関谷は」
「あん？」
「年中モッテモテでよぉ」
「そんな訳ねえよ。去年、までだったかな。
すっげえ、オタクっぽいカッコだったし」
「へえ、意外。」
お前の反応の方が意外だよ、俺は。
まあ急ごうぜ、と友人は校門に入る。
時計の針はまだ八時ジャスト。
友人の後を追おうとしたとき――。
向かえ側に、紗千らしき人物。
「さ、ち？」
ぼそり、と呟く俺。
人違いか。
あんなに、大人っぽく無かったしな。

「おい、関谷ぁ！遅刻すっぞ！」
「うえ、あ、はい！」

ざわつく教室。
あれ、今日遅刻調査日だったっけか？
「転校生だってよ！馬鹿みたいに美人！」
「へー」
「何だ、その、どーでもいいような」
どうでもいいし。

朝のＨＲ、入ってきた女子はあの、向こう側にいた大人っぽい女子。
「去年転校して、帰ってきたんだ。覚えてっか？」
え？
「新宮です。」
にっこりと微笑んだ。
人って変わるもんだな。
俺が言えないか。
「んー、じゃあ、知ってそうな顔してる、関谷！お前が校内案内してやれ」
「校内ぐれえ分かるだろ」
「去年改装したろ？」
「あー、そーっしたねえ」
俺は嘆息した。
「宜しくね」
不機嫌そうに彼女は言った。

「ふぅん、綺麗になったのね」
「・・・・・・・そうだな」
「貴方も、格好良くなった」

「へっ、どーもぉ」
「去年とは全く違う。敬語もないし」
「あんときは怖かったんだろ。」
「どういう意味？」
俺は、「何でも無い」と言い、彼女の機嫌を損ねてしまうのを避けた。
彼女も「あ、そ」と諦めてくれた。

「ねえ、怒ってる？」
「あぁ？」
屋上で、俺らは一息している最中、彼女は言った。
「ほら、最後の、私の」
ぎゅう、とコーヒーを握り締める彼女。
何か、相当我慢しているのか。
「別に。」
と答えると、握るのをやめ、【ふっ】と微笑んだ。
「そう」
ちょっと嬉しそうに見えた。

「お、二人でなにしてんの？」
しばらく経つと、友人が。
「いや？昔話さ」
「ふーん。な、帰ろーぜ。女子もお前待ってっぞ」
「へいへい。じゃーな、お前も一人で戻れるだろ？」
「あ、うん。ありがと」
無理に彼女は微笑んだように見えた。

「ごめん、無理」

「え、あ、そ、そうだよね！いきなり【好きです、付き合ってください！】なんて言われたら引く――」
「そうじゃねえって、んーと、こーいうの、表現するの苦手だから言い辛いけどさ」
「？」
「気になる人がいるんだ。だから、仲の良い友達じゃ、無理か――」
「最低！」
ばちぃん、とビンタ。
「なっ！？」
“最低！”
「・・・・・・・・・・・・」
何か、嫌なこと、思い出したな。

翌日、紗千は学校を休んだ。

日曜日。
あの日のように、雨が降っていた。
「ちょっと、冷えるな」
「透、あんたのクラスに紗千ちゃん戻ったんだって？」
と、おふくろ。
「？　なんで知ってんだよ」
「あんたの、いめちぇんのきっかけだからさね」
「・・・・・・・・・・、あ、そう」

なによそれー、と怒るおふくろ。
そんなのも俺は気にせず、窓から外を見ていた。
「それだけじゃなくって。」
「あん？」
「その、紗千ちゃんが帰ってこ――」
俺は、勢い良く部屋から飛び出した。
「早めに帰りなさいよ」
おふくろはそう、微笑んだ。

俺は傘を持ち、ある場所に向かった。
それは、学校の校門。
そこで、俺は紗千に傘をもらった。

「紗千！」
「せ、関谷くっ――」
びしょびしょで、傘も持たず、彼女は居た。
「なにしてんだ、風邪ひくぞ！」
傘とタオルを渡す。
何故か、傘だけ拒む。
「えへ、へ・・・・」
俺はあえて、あいつの頭にタオルをおいた。
表情を見たくないし、見せたく無さそうだったから。
「あの、ね。私」
「言わんくていい」
「・・・・・・・・・・・・・・うん」

「もう、決めた。」
「うん？」

「私、もう、誰とも付き合わない」
「あ、そ。んじゃ、俺の“傘”も受け取ってもらえないな？」
「・・・・・・・・・・クスッ。　あんたは例外よ」
彼女はそう言って、
傘と、俺の気持ちを貰っていった。

（後書き）

出来栄えが悪いです。
気分によって消します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8015q/

雨と君。

2011年10月3日11時25分発行